



## 日本における非物質文化遺産についての考察ノート

宋 俊華（中国 中山大学非物質文化遺産研究センター 助教授） SONG Junhua

今世紀のはじめ、ユネスコは非物質文化（無形の文化）を人類共通の遺産としてとらえ、保護していくことを提唱し、2001年5月に「第1回人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」を公表した。続いて2003年に第2回の傑作宣言を公表し、合わせて第32回総会で「無形文化遺産の保護に関する条約（無形遺産条約）」を採択した。非物質文化遺産に対する調査、研究、申請と保護は、世界規模の流れとなりつつある。

「知識認識論の視角からいえば、国際社会の『非物質文化遺産』に対する注目は、多少なりとも、日本における『無形文化財』という概念の影響を受けている」という指摘がなされているが、すると日本において「無形文化財」という概念はどのように生まれたのか、そして理論と実践の両面でどのような傾聴すべき経験をもつのか、これは我々が非物質文化遺産を研究するとき、解決すべき問題の一つであろう。

筆者が勤務する中山大学・中国非物質文化遺産研究センターは、教育部と広東省の人文・社会科学重点研究拠点であり、主な仕事は中国国内における非物質文化遺産についての調査、研究と保護である。筆者が責任者を務める「非物質文化遺産の理論と実践についての研究」は同拠点のプロジェクトの一つであり、研究は日本における「無形文化財」の理論及び実践にも及んでいる。

今年の2月、筆者は光栄にも神奈川大学21世紀COEプログラムの訪問研究員として招かれ、日本における非物質文化遺産の理論及び実践について現地調査を行うことができ、多くの収穫を得た。

2週間の日本滞在中、筆者は鈴木陽一教授の指導のもとで、神奈川大学COEプログラム拠点（日本常民文化研究所、大学院歴史民俗資料学研究所、同外国語学研究所中国言語文化専攻）東京大学東洋文化研究所、早稲田大学坪内逍遙記念演劇博物館、首都大学東京中国語学科、名城大学民俗学研究所、国立歴史民俗博物館、国立劇場、伝統芸能情報館及び東京・横浜市内の資料館や神社などを訪れた。神奈川大学の山火正則学長、中島三千男副学長、福田アジオ拠点リーダーをはじめ、橘川俊忠、佐野賢治、山口建治、及び東京大学の木康、首都大学東京の佐々木睦、何彬など非物質文化遺産学、民俗学及びその他関連学科の研究者、専門家の方々とお会いして意見交換する事ができ、また日本の神楽や寄席などの伝統芸

能を体験することもできた。

今回の訪問研究で、筆者は非物質文化遺産の理論に関する多くの資料を収集することができた。とくに日本における「無形文化財」の理論と実践については新たな認識を獲得し、それによって日本文化に対する理解が深まり、「非物質文化遺産の理論と実践」という研究課題の深化のための、理論的・資料的基礎が得られた。

筆者にとって、神奈川大学COEプログラムが提唱している「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という発想は非常に刺激的なものであった。中国における非物質文化遺産の研究、とりわけ伝統演劇の研究のために、多くのヒントを与えてくれた。これまでの古代演劇遺産についての研究は、文字資料から出発し、台本や文献の実証研究を重んじており、関連する非文字資料については重視してこなかった。しかし、体の動き方、音楽と唄い方、服飾と道具、そして舞台建築などは、演劇研究にとって大変重要である。演劇の本質は文字資料の中ではなく、むしろ非文字である「演じられている過程」にあると言っても過言ではない。人類の文化遺産の中の非文字資料を研究し、さらにそれらを体系化する試みは、演劇遺産の研究にとって革命的なことで、非物質文化遺産のその他の分野に与えるであろう影響も計り知れないものがあるだろう。

今回の訪問研究は、申請、出発、訪問考察から帰国まですべて順調であった。これはひとえに神奈川大学及びCOEプログラムの行き届いたサポートと手配のお陰である。最後に、お邪魔した全ての研究者、専門家のご理解とご支持、そして指導教官である鈴木教授、チューターである王京研究員、COE支援事務室のスタッフ全員の心温かいご協力と手助けに、心より感謝の意を表したい。（宋俊華氏は、2006年2月22日～3月7日訪問研究員として来日。）

翻訳：王京（COE研究員・RA）

宋先生は伝統演劇の専門家で、その学位論文「中国古代演劇服飾の研究」が教育部「全国優秀博士論文」に選ばれている。いまの関心は伝統芸能をはじめとする無形文化財の保護で、立法と実践の両面において「中国スタイル」を醸し出そうとしている。日本の経験は大いに参考になるよと、連日ハードな日程を終えて、先生は何かをつかんだように微笑んでいた。